

句集

紅椿

中司
満天

序

大阪府寝屋川市の中司満天さんが初句集を纏められることになった。

彼女とはインターネット句会のメンバーとしてご縁が生まれた。その後オフラインでの活動を初めた頃から、はく子さんらと共にずっと句会の世話人として労して下さった。彼女たちの献身的な奉仕なくしては今日の『ゴスペル俳句』は存在しないのである。

立話して溝浚へはかどらず

お歳暮の礼にはじまり長電話

明るくて愉快な満天さんのお人柄が滲み出た作品である。また面倒見の良さでも右に出る人はいない。新入会者があれば真っ先に声をかけ、句会のあった日には必ずねぎらいのこ

ントを掲示板に書いてくださる。これらはみな人知れず彼女の気配りなのである。

野路愉し案山子に声をかけもして

ユーモアなご法話にまず初笑

奇をてらわない幼子のような感興が彼女の作品の特徴でもあるが、箸が転んでもおかし
い…という感じの明るさは天性のものと思う。灘の酒蔵吟行をしたときになかなかの酒豪で
あることを知った。でもご主人は甘党だそうだ。そのご主人は陶芸を趣味とされているそう
だが満天さんの俳句にも関心を示されるという。仲睦まじいその様子を紹介しておこう。

屠蘇の酔思わず本音洩れにけり

愛のチョコ小ぶりなれども夫機嫌

理屈やことばを覚えることが上達の道だと勘違いする人が多いがそうではなく、自然が語りかけてくるメッセージを謙虚な姿勢で受け止めることが俳句なのである。

春光の金糸となりて水底へ

身辺句を得意とする彼女であるが吟行一途に励まれてかかる新天地が開けようとしている。俳句には卒業も定年もない。むしろここからが壺中天への世界、これまでの労が報われるときである。ともに切磋琢磨して頑張りましょう。

平成三〇年七月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

ごみ出しを物見す屋根の寒鴉

やや不満席譲られし初電車

年の瀬の一つつつ消す備忘メモ

膝の上の猫とお喋り日向ぼこ

朝刊のずしりと重し十二月

塵ひとつなき古町の路地小春

朝霜の路地に響きし靴の音

文化の日出向く夫婦の趣味は別

湖澄むや水面に白き雲浮かべ

甘藷掘り赤白帽子賑はひて

山の色つるべ落しの日に失せる

もぐ人もなく山畑の柿たわわ

客寄せの毬栗筧に笑ひをり

碧天に一刷け白き秋の雲

一雨を欲る軒先の吊忍

庭に水打ちて寛ぐ心地かな

池小春メタボの鯉の大吐息

カリヨンの楽に舞ふ散紅葉

落暉いま炎のごとき冬木立

日の沈むまでの束の間秋惜しむ

学び舎に残る灯のある秋の夜

うそ寒く首にタオルの厨事

炎天下赤信号の長きこと

敬老日見守り隊へ感謝状

夜干してふとうち仰ぐ月涼し

敬老会みな大笑ひ腹話術

大玻璃に秋の雲ゆくレストラン

手びねりの風鈴殊に機嫌よし

白き齒をみせて挨拶プールの子

素振りする野球少年雲の峰

無農薬胡瓜驚くほど太し

雨意兆す紫陽花の毬落ち着かず

あるなしの風に錐揉む竹落葉

マネキンの裸にされて四月尽

駅前
の
シヤツ
ター
通り
春愁
ふ

曇
天
を
払
ふ
淡
墨
桜
か
な

手掴みに量りあさりを売りにけり

車窓なる指呼の山巔春の雪

制服のはち切れさうや卒業子

順調な術後と笑みて春を待つ

アドバルン直立したる四温晴れ

老若の火の用心の声揃ふ

マフラーをひとひねりして若がへる

気に入りの花柄選りて日記買ふ

突風に飛びし冬帽追ひかくる

宇治なれや茶の花垣の遊歩道

白鷺の中州に集ふ紅葉川

広前で諍ふ猫や神の留守

神苑の倒木数多身にぞしむ

句座の卓沢に摘みきし草の花

クリスタルビル秋天へ尖りけり

小鳥来る宮居の樹下に力石

葎の棘尖る朝とれ秋なすび

すれ違ふ炎天の路地みな無口

空 蟬の祈る姿に朝日射す

襟足は大人の気配浴衣の子

疲れ目によしと青田の道選ぶ

水面より半顔出して河馬涼し

緑陰に献花の絶えぬ地藏堂

大楠の仁王立ちして藤纏ふ

石仏に十二単の花ざかり

美容師の鋏の音に春眠し

茹で若芽白磁の皿に盛り付ける

恋猫の声アルトからテノールへ

観音の御手さす方に風光る

私よとマスク取りつつ近づき来

鶴頸に一茎よろし寒椿

あひたがひ存問かはし初稽古

屠蘇に酔ひ思はず本音洩れにけり

夜廻りの徒らに豚汁ふるまはれ

懐手押さねば開かぬ自動ドア

一村の軒という軒柿すだれ

秋天へ大屋根の反る本願寺

澄む水の雲居縫ひゆく錦鯉

爽やかや少女にノーベル平和賞

咲きほこる金木屋に雨無慈悲

野路愉し案山子に声をかけもして

丹田に力を入れて南瓜切る

化粧水よろこぶ肌や今朝の秋

帰省子の半年分の話聞く

救急車間遠にひびく台風裡

目覚ましのベルより早し蝉しぐれ

愛犬も吾もおしやれの梅雨合羽

子燕の巢から落ちたと大騒ぎ

音ほどに降つてくれずや梅雨の雷

絵手紙の涼し胡瓜のはみ出して

片陰に尽きることなき立ち話

立ち話して溝浚へはかどらず

館うらら結婚式のリハーサル

花屑の中よりぬつと亀の首

花筏
ペ
ツ
ト
ボ
ト
ル
を
虜
と
し

自
転
車
の
ド
ミ
ノ
倒
し
や
春
疾
風

強
東
風
に
翻
弄
さ
る
る
五
色
幕

機嫌よきペットボトルの風車

春の雪工事現場の修羅隠す

消息をほ句に詠まれし賀状かな

ユーモアなご法話にまず初笑

夜廻りのをみなの声の若かりし

電飾の贅を競ひて街師走

忘年会手作り料理持ち寄りて

待合室ひとりが咳けばつぎつぎと

閘門を出でてより澄む淀の水

救急車向ひに止まる夜寒かな

いま抜いたばかりと大根持ちくれし

京なれや大路小路に菊香る

御神体てふこの杜の秋を聞く

登高す女人高野のよろい坂

絵手紙の筆遊ばせて灯親し

飛火野の起伏にあそぶ秋茜

天高く響く部活の子らの声

通夜終へて帰るさの道虫しぐれ

水煙にとどまらざりし秋の雲

帰省子の話は尽きず夜の更くる

雷鳴に包丁とまる厨かな

館涼し文字躍動す大墨書

大川に揺るるネオンの文字涼し

合掌のごと花閉づる蓮夕べ

水墨の花鳥涼しき茶掛かな

四月馬鹿女性専用車と知らず

回廊に古都の万緑展けけり

ゴツホ展へと長蛇なす日傘かな

赤提灯屋台は花の客で混む

挨拶の出来る子となり山笑ふ

コンサート出て春宵の街帰る

うそ寒き国会中継見てをれず

菜の花のひと茹で膳の華となる

厨から脱出できぬ大晦日

夜回りの不揃ひなるは夫の声

街師走四面楚歌なる選挙カ―

ひと筆がくねれば蛇や賀状書く

裸木となり網目なす梢かな

掃き寄せている間も背なに銀杏散る

冬菊の縁取る遺影悼みけり

松茸が目当てと集ふバスツアー

文化の日我が街百景写真展

稜線にスポットあてて秋日落つ

思惟仏辞してよりつく秋思かな

返信を書くに墨する夜の秋

丹の橋を渡る和服の白日傘

天井は透かし彫りなる堂涼し

朝市に並ぶ胡瓜に個性あり

立葵背筋伸ばして仰ぎけり

梅雨寒や明るきニユースないものか

万緑を眼下としたるカフエテラス

滝道を塞ぎし岩に謂はれかな

野球少年カーネーションを買ふ列に

後戻りできぬ桜の通り抜け

川沿ひに点る雪洞夕朧

春愁や寝癖つきたる髪型に

愛のチョコ小ぶりなれども夫機嫌

草餅の黄粉なるべし膝払ふ

立春やどさりと届く旅雑誌

あれこれと書きて名無しの年賀状

夜廻りを終へて熱燗賜りぬ

柚子風呂に明日のだんどり思考中

大いなる聖樹を点すケアハウス

葉牡丹の渦確かめて選びけり

人垣は試食コーナー街師走

をみなみな酒豪揃ひや忘年会

新聞の切り抜きに飽く炬燵かな

大吉のみくじ疑ふ神の留守

格子戸に透く大輪の菊の鉢

ほころびし四つ目垣より秋の蝶

身に入むや神域ここだ出水跡

対岸の磨崖弥勒に秋日濃し

山宿の贅松茸の土瓶蒸し

包丁の抜き差しならぬ栗南瓜

台風過鉢物大事なかりけり

白桃の包装過保護かと思ふ

風鈴の音は紛れなき南部鉄

存問の文に墨磨る夜の秋

車椅子押して加はる踊の輪

露天湯の帰るさの道風涼し

梅雨籠り夫の政論聞き流す

定例句会入選句

春光の金糸となりて水底へ

冬日燦両手広げしイエス像

庭園の曲水に沿ふ石露の花

慰靈碑へ千手を翳す楠若葉

花吹雪いまし特急通過中

花の道抜けて海坂一望に

園児らの
双手をあげし
花吹雪

蒼天へ尖る
クルスに風光る

白梅に隣る
ルルドの聖母像

高台に立つ慰霊碑や阪神忌

青天井小突く水面の赤とんぼ

ゆく雲を映して池の澄めりけり

樹下に坐す微笑観音薄紅葉

法話身に入みて背筋を伸ばしけり

水揺れて展示のヨツト動くかと

青空を蹴りては進むあめんぼう

碧天へ融け入るごとし花あふち

バラア―チ潜る園児らみな笑顔

日向ぼこ腰痛封じの石に座し

秋蝶のつかずはなれず力石

万緑の郷に傾く電車かな

滝音に佇ちてストレス癒やしけり

風光る山湖を駈けるさざ波に

梅園の歌碑に屯す吟行子

梢もる日のあたたかし親子句碑

しぐるれば機嫌の悪し摩尼車

秋草を数へ万葉歌碑巡る

川蜻蛉上を下へとホバリング

秋暑し貨物列車はまだ続く

一刷の風に大袈裟蓮浮葉

万緑の中より音や電車来る

万緑の底ひに瀬波きらきらと

池の蓮風に巻葉を解かんとす

寺池を莊嚴したる半夏生

真新し千本鳥居風光る

梅東風の通ふ観音広場かな

観音のみ手かざす丘梅真白

銀杏散り敷いて華やぐ御堂筋

四阿に憩へば四方の昼の虫

空ろなる埴輪のまなこ秋思あり

身に入むや千人針の斯く古りて

酒蔵の湯気立ちのぼる初御空

ふくよかな裸婦の画展や館ぬくし

万葉の数多の歌碑に小鳥来る

薔薇アーチ聖母マリアの在せりけり

春うらら車掌は若き女の子

天高し奇岩奇峰の島めぐる

コスモスの百万本に空青し

吟行句会入選句

秋晴やシルバーハイカー足軽し

薦紅葉自由奔放築地塀

夏雲を突き上げてをる斜張橋

風光る千木にしるけき葵紋

葉牡丹の大小と花舗占むる

池涸れて風倒木の横たはる

金色の冬日をはじく九輪かな

雨音の間遠となりて蝉時雨

水亭の大玻璃を打つ緑雨かな

書院の間涼し墨書の壁画また

白鳥の首をS字に羽繕ひ

菊あるじ苦労話をひとくさり

春慶の船屋形ある紅葉影

まず茅の輪くぐり神苑吟行す

奥院へ道は四葩の切り通し

飛火野にはじける声は遠足子

砂づりの藤のしづくを掌に

春愁や長さの違ふぞうの牙

フラミンゴ首をS字に曲げ昼寝

広げたる孔雀の羽根に春日燦

色変へぬ松水面へと傾きぬ

柏手の音の揃ひて秋高し

噴水の穂と白雲の出会いかな

傘高く翳す大輪白牡丹

水上橋行きつ戻りつ春惜しむ

砦めぐつつじ背にしてVサイン

蔦覆ふ珈琲館の昼灯

秋日濃し直哉旧居の蔀戸に

緑蔭のアトリエ空の香に満てる

螢火に水さすなかれ小糠雨

画布ひろぐインクラインの緑陰に

汗ふきて天井の龍仰ぎけり

風の丘指揮者のごとく案山子立つ

足湯して眼下の海に秋惜しむ

園巡るガイドの笑顔爽やかに

すぐそこと標にあれど秋暑し

秋草を供花とす畦の石仏

緑陰をはみ出すフリーマーケット

行厨の吾らに滝のしぶきけり

花見船ビルの間よりお城見ゆ

大川を行き交ふ船に花吹雪

口もとの話し出しそな女雛かな

園児らのお行儀座り雛の前

うららかやマリアの像の辺はことに

夏霧の稜線幾重墨絵めく

梅雨寒し目鼻欠けたる道祖神

神の滝しぶき洗礼享くるごと

万緑を朱の吊橋が繋ぎけり

目まとひを払ひはらひて間歩に入る

天気予報はずれて笑ふ里の山

春愁や重軽石の重きこと

数へ日のメモを片手に右往左往

折れずして直立したる枯蓮

山門のうちそとに散る大銀杏

露天湯に肩のしずめば虫浄土

虫の音の間遠となりて夢の中

石舞台そよ吹く風にあきつ舞ふ

百選の棚田はいまし豊の秋

春愁や朽木然たる御神木

ブナ林の奈落の秋を聞きにけり

露天湯の四囲に広がる春の雪

お歳暮の礼にはじまり長電話

愁思ともモデイリアーニの長き顔

鯨刺やきらめく湾へ矢のごとし

彫深き仁王の顔の春の塵

ブロンズの裸婦黄落にきらめきぬ

あとがき

思い返せば十五年ほど前のことになります。仕事を辞めたのを機に何か余生の趣味をと考えて地元の俳句入門講座を受け、とにかく飛び込んでみなさい…という講師のことばに後押しされて俳句を始めるようになりました。

ちょうどその頃、阪急洛西口駅の新駅開業記念行事として吟行俳句会が催されることを知り句友のはく子さんと一緒に参加しました。その時の選者がみのるさんだったのです。それをご縁に『ゴスペル俳句会』のメンバーにも加えて頂いて現在に至っています。

みのるさんの指導は吟行による徹底した写生の実践訓練、親しい仲間と一緒に毎月色々な場所を吟行し、お天気の良い時にはみなで車座になってお弁当をいただきます。同じ感動を

頒ちあえる仲間があつてこそ俳句ライフであることを教えられました。俳句と関わることで得られた素晴らしい人間関係は生涯の私の宝物です。

これからも健康に気をつけて末永く俳句ライフに励んでいきたいと思ひます。この句集を纏めるにあたり身に余る序文を賜り何かとお骨折り頂きましたやまだみのるさんと、印刷・製本の労を引き受けて頂いた有松せいじさんに心から感謝し厚くお礼申し上げます。

平成三〇年七月吉日

中司 満天

『紅椿』 中司満天句集

平成三〇年七月三〇日

印刷

平成三〇年七月三〇日

発行